

# 白への恐怖、黒へのあこがれ

## ——ウィンキン・デ・ウォードの標題紙（2）——

### Not white, but black ; title-pages made by Wynkyn de Worde(2)

---

高野 彰

#### 要 旨

ウィンキン・ド・ウォードが標題紙を「ページいっぱいの表示」にするための模索はまだ続いた。1512年、彼は標題紙に「内容説明」、その簡略版ともいえる「目次」、さらには「詩」まで示すようになる。それでもこれらのおかしな表示形を全部併用すると、標題紙は「ページいっぱいの表示」になることから、1517年にはついに標題紙を文字だけで埋め尽くすことが可能になった。とはいってもこの表示形はホイットントンの著作専用表示形であったため、模索はまだ終わらなかった。

1520年になると、標題紙に「囲み飾り」を使う状況が生まれる。この飾り内でも、「ページいっぱいの表示」が求められ、埋め尽くすための工夫は続く。おかげで「Cum privilegio」、「Humiliabit calumniatorem」、「小図柄」も埋め草として使われたのである。しかしそれらよりも重要な工夫が生まれた。文字を使った図柄表示である。おかげでたとえ文字表示をしても、行いっぱいの表示をしなくてすむことが可能となり、文字を使った標題紙表示が大幅に拡大することになった、と言うより、いつでも文字だけの表示が可能となったのである。かくしてド・ウォードは標題紙の行いっぱいの表示さらには「ページいっぱいの表示」というくびきから解放されることになった。（続く）

#### 14. 内容説明（1512年～）

1512年にド・ウォードは当時の文法家で、校長のホイットントン（Robert Whittinton）の文法書を初めて出し、以後20年以上に渡って出版することになる。この状況は実質的には独占に近かったが、それにあえて楯突く印刷者はほとんど出てこなかった<sup>(13)</sup>。しかしホイットントンは当時リリー（W. Lily）、コレット（J. Colet）さらにはホーマン（W. Horman）といった文法家とラテン語の文法論争をしている渦中の人物でもある。ド・ウォードはホイットントンの文法書が販売に値するという読みと、ホイットントンが渦中の人物という点とを天秤に掛け、前者を選択したのであろう。ド・ウォードの商才を認めないわけにはいかない。しかしその決断の中には標題紙表示で振り回されるという出来事は含まれていなかったはずである。

ホイテントンは大部で、包括的な文法書を（１）語形論と統語論、（２）韻律、の二部構成で提示しようと計画していたらしい。その様子は彼の本の標題紙から垣間みることが出来る<sup>(14)</sup>。

ホワイト (Beatrice White) はこのように言い、ホイテントンの構想した文法の中身を次のように推測している<sup>(15)</sup>。

Part I.

Book I. De Nominum Generibus.

II. De Nominum Declinatione.

III. De Heteroclitis Nominibus.

IV. the Syntaxis [推定]

V. De Verborum Praeteritis et Supinis.

VI. De Verborum Formis de defectiuis et anomalis, confusis,  
syncopatis et apocopatis. (Appended to Bk. V.)

VII. De Octo Partibus Orationis [推定]

VIII. De Synonimis [推定]

Part II.

De Syllabarum Quantitatibus.

ド・ウォードは1512年からホイテントン本を出し始めたと言われている<sup>(16)</sup>。しかしSTC (2nd ed.) は疑問符を付けながらも、2点のホイテントン本 (stc. 25443.4, stc. 25479) が1511年の出版と推定しているので、本稿でもこの推定年を採用しておく。

第1点目のホイテントン本は図14-1 (stc. 25443.4) に示した通りであり、下記に文字の部分を転写した。

¶ Whythyntoni editio.

¶ Declinationes nominu[m] tam latinorum q[uam] gr[a]ecorum/  
patronymicor[um] et barbarorum e Prisciano Sipontino |  
Sulpitio [et] Ascensio amussatim collect[a]e cum commenta |  
riolo interliniari [et] dictionu[m] interpretatiunculis. In qui |  
bus numerose digerendis adeo seruat[ur] mediaru[m] sylla |  
barum productio et abbreviatio vt studiose eas legenti |  
et qua[n]titatem [et] accentum mediarum syllabarum in no |  
minibus saltem cognoscere/ vel parua pr[a]eceptoris dilu= |  
cidatione haud erit difficile.

この著作はホワイトの推定構想に当て嵌めれば Part 1 の II (De Nominum Declinatione) にな

表 14-1：内容説明

1511	1512	1513	1514	1515	1516	1517	1518	1519	1520		
P25443.4	T1, Con9, E P 25447 E	T1, Con9, E			P25444 E	T4, Con9, E	P25445 E	T4, Con9, E	P 25446 E	T3, Con9, E P 10450.7E	T3, Con5, E



図 14-1 (stc. 25443.4, 1511? 年)  
(British Library 所蔵)



図 15-1 (stc. 25479, 1511? 年)  
(British Library 所蔵)

る。上記の転写を見ると、書名を見つけにくいですが、これまでド・ウォードは書名を「巻き軸」内に表示してきたので、とりあえず「Whyththynon Editio」を書名としておく。書名の下部には「Declinationes」で始まる説明文、さらにその下には絵が配置されている。

この表示形は 1510 年の「here' 説明文」と同じであり、内容を専門家向けにラテン語で書いたにすぎない。ホイティントン「here' 説明文」の形式を参照し、説明文を作成したのではないだろうか。出版物による文法論争がついに始まった。

しかし表 14-1 から分かるように、この表示形式は「De Nominum declinatione」という作品専用であり、唯一の例外は 1520 年の stc. 10450.7 にすぎない<sup>(17)</sup>。図 14-1 だと、説明文は 9 行なので、書名の行数（1 行）を加算すると 10 行となる。そこに絵が加われば、標題紙には文字と絵が半々に示されたことになり、標題紙には十分すぎるほど「ページいっぱい」の表示が施されたことになる。

### 15. 1 ページ表示の目次（1511 年～）

標題紙に文字の行がかなり目に付くようになったとはいえ、「内容説明」だと作文が必要であ

る。そのためホイティントンはその手間を省くと同時に、内容をもっと直接的に示す目的で「目次」を提示するという奇策に出た。しかも図 14-1 より分かり易い表示にするために、各目次をほぼ行単位で表示した。それが図 15-1 (stc. 25479, 1511 年) であり、文字の部分は下記に示した。

¶ Opusculum affabre recognitum |  
 et ad vnguem elimatum. |  
 ¶ De nominum generibus. |  
 ¶ De verborum preteritis et supinis. |  
 ¶ De formatione preteritor[um] [et] supinor[um] verbor[um] passiuor[um] /deponentiu[m] : [et] com[m]unium. |  
 ¶ De verbis defectiuis. |  
 ¶ De v[er]bis que in prima p[er]sona sunt [con]fusa. |  
 ¶ De iis que confusum habent preteritu[m.] |  
 ¶ De crementis verbor[um] et medie syllabe |  
 quantitate in omnibus verbis. |

表 15-1 : 1 ページ目次表示 「De Nominum generibus」

1511	1512	1513	1514	1515	1516	1517	1518	1519	1520			
P25479E	T2.Con.9.E				25479.5 E	T1.Con.12.E	P25479.6E	T1. Con.12.E	P 25540.5E	T2+E+Con12	P 25479.14E	T2.Cont10.E

当時、ド・ウォードは標題紙いっぱいの表示を模索し、書名以外の追加事項を探し求めている。しかし書名以外の追加事項の中に「目次」は入っていなかった、というより「目次」を表示するとは思ってもみなかったはずである。とはいっても図 15-1 の 9 行という具合に、目次表示は行数を簡便に増やせる魅力的な工夫でもある。そのためド・ウォードは自ら提示した表示方法ではなく、ホイティントンからの提案を採用したのだという後ろ向きの理由を付けて用いたのではないだろうか。「目次」表示を書名以外の追加事項として一般的に認めるのであれば、他の著者の作品でも「目次」表示をするはずである。しかし表 15-1 を見る限り、その気配はない。「目次」の表示はホワイトの推定構想で言えば「Part 1, Book 1 (De Nominum Generibus)」専用の工夫になる。

ホイティントンは「目次」表示を提案したが、表示形まで指定したのであろうか。マッケロー (R. B. McKerrow) は「16 世紀の最後の四半世紀さらには 17 世紀全般にわたっていえることだが、標題紙とは著者の手になる作品の一部というより、印刷者や出版者が本に加えた説明ラベルの色彩が強かった」と言っている<sup>(18)</sup>。とすれば、「目次」表示の提案者はホイティントンであっても、1 項目 1 行の表示形式はド・ウォードの案出かもしれない。ド・ウォードはホイティントン本の目次表示によってますます文法論争の深みにはまっていた。

## 16. 2 ページ表示の目次 (1512 年～)

第 15 項で、「目次」表示形を採用したことによって、文字行数が簡便に増やせると言ったが、表示範囲はあくまで標題紙 1 ページ内の出来事であった。ところが 1512 年になると、1 ページという限界を越え、2 ページ表示の目次が出現した。一度「目次」を表示するという方式が採用されれば、たとえ目次が 2 ページに渡るとしても、その表示形を止める理由はなくなってしまう。図 16-1 (stc. 25525, 1512? 年) がまさにそれであり、標題紙ページとその裏ページを使って目次が表示されている。ホイテントンはますます文法論争にのめり込み、他方、ド・ウォードはその側面援助を強制させられていった。そして 2 ページ表示を採用した時点で、ホイテントン本に関する限り、標題紙表示はド・ウォードの統制できる限界を越えてしまったのであった。

この表示形式はホワイトの推定構想に当て嵌めれば、Part II (De Syllabarum quantitate) になる。目次は大体 1 行単位で表示されているので、34 行とか 35 行になれば、標題紙の裏ページまで使わざるを得ない。

1512 年頃はまだパラグラフ形書名も見かける。というより標題紙が絶対に欠かせない時代でもなかった。標題紙を用いたとしても、その表示を模索していた時代でもあるから、表示が例え 2 ページに渡っても、見開きの状態であれば、読むのに苦勞しない。しかし 2 ページ目が標題紙の裏ページではページをめくらないと読めない。この形ではどこかに貼り付けたり<sup>(19)</sup>、店頭展览展示



図 16-1-1 (stc. 25525, 1512? 年)

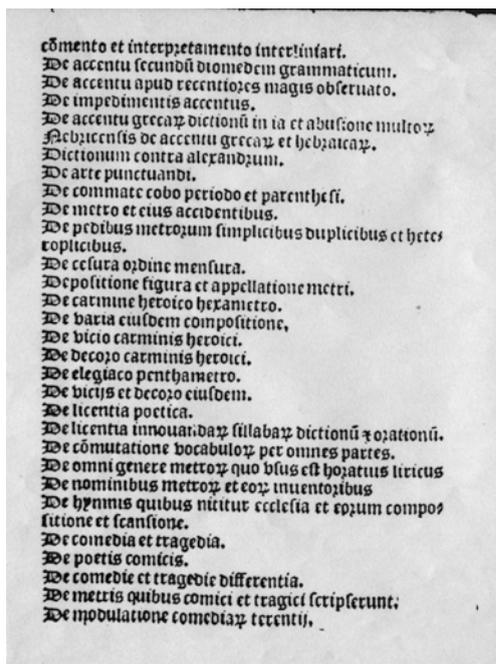


図 16-1-2 (stc. 25525, 1512? 年)

するときには中途半端な広告となってしまふ。とはいっても表16-1からわかるように、2ページ表示形式が他の著作の表示形に採用されることはなかった。

これまで「説明文」や1ページ「目次」は下記の順序で表示されてきた。

書名 + 説明文又は1ページ目次 + 絵や印刷者マーク

ところが2ページ目次は次のような表示順序に変更された。

書名 + 絵（印刷者マーク） + 目次

図16-1は35行もの目次を表示するため、最終行は標題紙裏になってしまう。この後に絵（印刷者マーク）を附すことになれば、絵は標題紙の裏ページにきてしまう。絵はド・ウォードの印刷者マークなので、標題紙の裏ページでは自分の宣伝が出来ない。そのために絵を書名のすぐ後にくるように配置変えをしたのである。第7項で述べたように、印刷者マーク（絵）は空白に対する埋め草であるが、もし使用するのであれば、宣伝の有効な手段として活用しようとしていたことが分かる。

しかしこの表示形はこうした点より重要な要素を含んでいた。目次が35行もあるので、文字だけで「ページいっぱい表示」が可能だったからである。にもかかわらず印刷者マークを併用するのはなぜであろうか。標題紙が2ページであっても、マーク（絵）がなければ2ページ目の下部に余白ができてしまう。印刷者マークはこの表示形でも余白を埋めるために用いられたと見てよい。ド・ウォードは標題紙が1ページでも、2ページでも、「ページいっぱい表示」する原則は変えなかったことがわかる。

表 16-1：2 ページ目次表示

1512		1513		1514	1515	1516		1517		1518	1519	
P 25525 E	T2+E+Con3	P25509.5 E	T2+E+Con3			P 25510 R	T2+E+Con3	P25511.5 E	T2+E+Con.6		P 25512 E	T4+E+Con6
											P 25514 E	T4+E+Con2

先に、図14-1と15-1の出版年を1511年と仮定した。標題紙の表示形が「内容説明」（1510年）から「1ページ目次」（1511年）そして「2ページ目次」（1512年）へと推移するのは自然な流れである。とすれば、少なくとも図14-1と15-1は1512年の図16-1より前に出版されたと推定できる。2点の出版年は1511年とみなして良い。

## 17. 「詩の表示」（1513年～）

ホイティントンは目次表示付きで本を出版してもらったが、それによって彼の論敵からの非難が減少したわけではなかった。1512年に彼は自分の出版物（De Concinnitate Grammatices et Constructione）（stc. 25541）の前書き（Preface）で彼の師 Stanbridge を「学芸の最高位者」と位置付けているが、この発言は、たちの悪い批評家からの攻撃を予想してのそれであったのであろうか<sup>(20)</sup>。前書きの題名は次の通りである。

Celeberrimo viro sum[m]aque observatione colendo magistro Stanbrigo artium  
magistro dignissimo Whittintonus salute[m]<sup>(21)</sup>

そして反撃の気持ちが次第に高じてくると、1513年からは反撃の言葉を標題紙に提示するようになる。しかし標題紙上ともなるとさすがに散文と言うわけにいかず、図 17-1 (stc. 25459.2, 1513年) のような詩形に変更されている。標題紙がついに論敵を攻撃する場所に代わってしまったのである<sup>(22)</sup>。

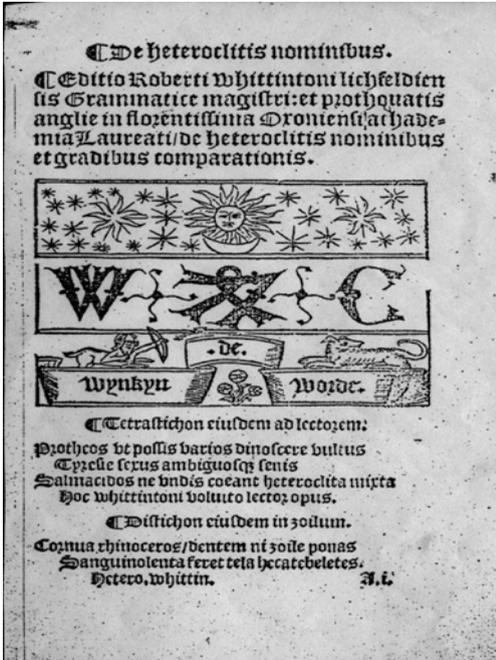


図 17-1 (stc. 25459.2, 1513年)

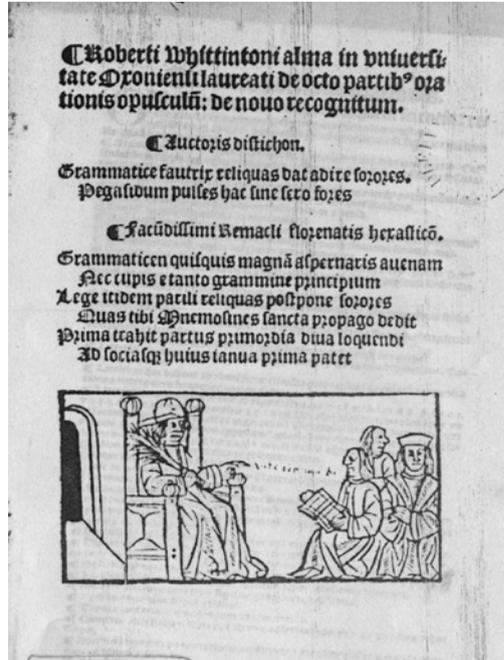


図 17-2 (stc. 25499, 1519年)

詩は二行 (distichon) に加えて、四行 (tetrastichon) と六行 (hexastichon) があり、「目次」の場合と同じように、絵の前 (図 17-1) や後 (図 17-2) に配置されている。図 17-1 を転写すると次の通りである。

¶ De heteroclitis nominibus. |  
¶ Editio Roberti whittintoni lichfeldien |  
sis grammaticae magistri: et prothouatis |  
anglie in florentissima Oxoniensi achade= |  
mia Laureati, de heteroclitis nominibus |  
et gradibus comparationis.  
木版画 (印刷者マーク)  
¶ Tetrastichon eiusdem ad lectorem. |

Protheos vt possis varios dinoscere vultus |  
 Tyresie sexus ambiguosq [ue] senis |  
 Salmacidos ne vndis coeant heteroclita mixta |  
 Hoc whittintoni voluto lector opus. |  
 ¶ Distichon eiusdem in zoilum. |  
 Cornua rhinoceros, dentem ni zoile ponas |  
 Sanguinolenta feret tela hecatebeletes. |

しかし「目次」の場合と違い、「詩」表示が標題紙裏まで及ぶことはなかった。二行詩と六行詩を併用すると8～10行表示になることが多いので、そこに書名が加われば、最低でも9～11行の文字行となる。詩の単独使用例は少ないが、STC.25569.3 (1520年)の場合、書名が8行で、そこに詩3行が加わるので、11行となる。となれば、詩の併用と殆ど同じであり、そこに「絵」が加わることによって、「ページいっぱい表示」は十分に達成できる。もっとも行数は多くても、詩のような当てつけ表現ではホイティントン本に使えても、他の著者本には活用できない。

#### 18. 「文字書名」の復活 (1517年～)

1517年になると下のような2表示形が出現した。

書名+目次+詩 (図18-1、stc. 25540+, 1517年)

書名+詩 (図18-2、stc. 25498.3, 1517年)

この2表示形を見て何か気付いたであろうか。上記2形には「絵」が含まれていないのである。そしてこの点を裏付けるように、ド・ウォードの表1を見ると、「文字書名」の項が1517年から再び記載を開始している。1501年から数えて16年目にしてついに「文字書名」が復活したのであった。そしてこの復活形は「目次」と「詩」とを併用しているが、文字だけで構成され、「絵」を使用していない。「絵付き」表示で代用表示してきた努力がついに報われたのである。

1501年には「文字書名」が「ある要件」を充たさないために「絵付き」に移行した。そして1517年の場合はその「要件」を充たす条件が整い、「絵付き」形から「文字書名」形に移行できた。1501年と1517年の表示形は正反対の動きをしていたので、1501年に移行した理由は1517年の「文字書名」が語っているといえよう。

そこで1517年の図18-1を見ると、ここでは文字が

「書名+目次+詩」

の順に示され、文字行数は書名4行、目次10行そして詩17行の合計31行になっている。加えてこのページ(標題紙)は巻頭なので、本文より大き目の活字が使われている。おかげでこのページに占める文字の多さを一段と強調することになった。まさに「ページいっぱい表示」である。

それに対して図18-2は

「書名+詩」

の順に示され、書名が4行、詩10行の計14行となり、余白が半分弱もある。しかしこの形は1521年で使用を停止している。図18-2形は暫定的な使用であり、最終目標は図18-1形であった事がわかる。実は図18-2形は既に1514年(stc. 25496.3)(図27-2)に試みられたが、わずか1回の使用に留まった。「ページいっぱいの表示」と言う目的に十分に答えられなかったからであろう。先に1501年の移行理由は「ページいっぱいの表示」が不可能なためと推定すると共に、その結論を保留にした。1517年の表示形はこの結論の正しかったことを実証したことになる。

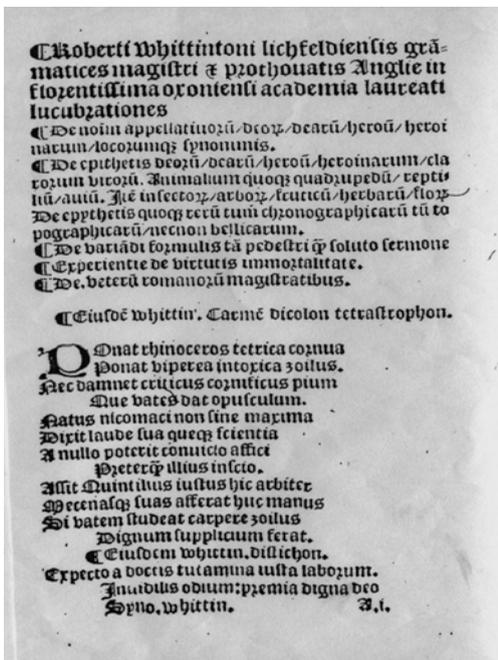


図18-1 (stc. 25540 + , 1517年)

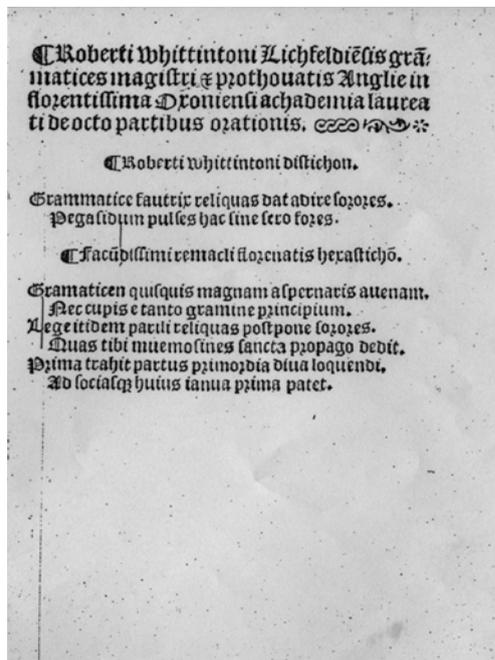


図18-2 (stc. 25498.3, 1517年)

ホイティントンのために使い始めた「目次」と「詩」が「文字書名」として必要不可欠な追加事項となってしまった。通常「文字書名」と言えば文字だけの標題紙表示を意味しているの、どんな本にも適用できる表示形である。ところが1517年型の「文字書名」は、前述したように、特定のホイティントン本にしか適用できない特殊な表示形の意味に変形されてしまった。そのため他のホイティントン本に適用できないばかりでなく、他の著者本にも全く採用不可能な表示形となってしまった。おかげでホイティントン本は1517年以降も「絵付き」形を採用し続けるしかなかった。

19. 「囲み飾り<sup>(23)</sup>」(1520年～)

ド・ウォードと同時代の同業印刷者で、且つ競争相手でもあるピンソン(Richard Pynson)は

1519年になるとホーマン (Horman) と *Vulgaria* の出版契約を結んだ<sup>(24)</sup>。ピンソンの標題紙については別に稿を起す予定であるが、彼はこの本の標題紙 (図 19-1 (stc. 13811, 1519年)) を囲み飾りで飾ると共に、1512年に既に使用し始めていたローマン体で刷った。ローマン体がまだ珍しい時期にこの書体を「囲み飾り」用の専用書体として全面的に採用したのである。ピンソンはゴシック体を「絵付き」用、そしてローマン体を「囲み飾り」用として使い分けようとした気配が感じられる。その意味で彼は「囲み飾り」をローマン体で表示する先鞭を付けたと言える。



図 19-1 (stc. 13811, 1519年)

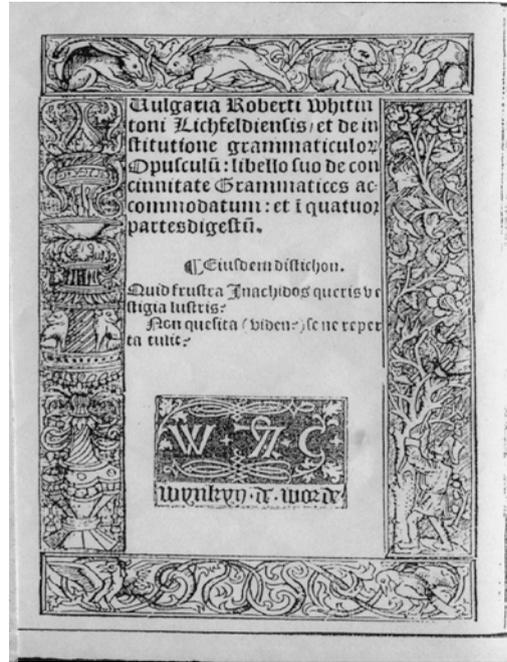


図 19-2 (stc. 25571, 1520年)

ピンソンが印刷したホーマンの *Vulgaria* をド・ウォードの立場から見ると、ピンソンはド・ウォードの商売敵、ホーマンとホイティントンも商売敵である。これほどまでに競合関係がある中で *Vulgaria* が出版された。これではド・ウォードに対してピンソンの *Vulgaria* 出版を意識するなといっても無理である。

ド・ウォードはピンソンに遅れること1年後の1520年にホイティントン本 (図 19-2, stc. 25571) で囲み飾りを使った。しかも図からわかるように、この本も *Vulgaria* であった。そして次の1521年からは「囲み飾り」を本格的に使いだす。加えてローマン体を囲み飾りで初めて使うと共に、ド・ウォードの表1に示したように、囲み飾り形の本のほとんどをローマン体で表示したのである<sup>(25)</sup>。

もっとも彼の囲み飾りはド・ウォードの表1で (d) と付記したように、その大半が寄せ集めの図柄、即ち縁枠であり、コンパートメントという特定の囲み飾り用に彫られた図柄は少なかつ

た。ド・ウォードは囲み飾りを使用し始めたものの、コンパートメントをほとんど持っていないことがわかる<sup>(26)</sup>。

## 20. 「囲み飾り」の使用目的

ここでホイテントン本の表示形の推移を一覧した表 20-1 を見てみよう。1519 年まで「絵付き」が安定して使われているが、20 年から減りだし、22 年以降は 1 件も用いられていない。それに対して「囲み飾り」は 1520 年に初めて使用されると、次の 21 年には急増し、そのまま多用され続ける<sup>(27)</sup>。

表 20-1: ホイテントン本の「絵付き」と「囲み飾り」の件数

	1517	1518	1519	1520	1521	1522	1523	1524	1525	1526	1527	1528	1529	1530	1531	1532	1533	1534	1535
「絵付き」	8	3	6	2	1														
「囲み飾り」				1	11	5	5	8	8	8	6	5	7	1	3		7		

1517 年に「文字書名」が復活すると、「ページいっぱいの表示」が文字だけで行えることが期待された。しかしこの表示形はホイテントンの 1 著作の専用表示形に留まったことから、「絵」が「ページいっぱいの表示」を補完する重要な働きをし続けている状況に変わりはなかった。こうしたときにホイテントン本が「絵付き」から「囲み飾り」へ表示変更をしたのである。

「囲み飾り」も一種の絵であるから、囲み図柄を絵とみなせば、「絵付き」と同じである。文字

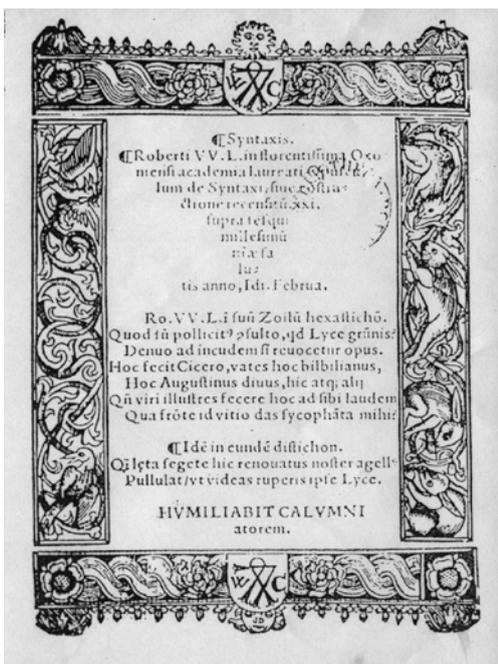


図 20-1 (stc. 25459, 1521 年)



図 20-2 (stc. 5542.3, 1529 年)

表示の場所がページの上部か真ん中かの違いにすぎない。従って「囲み飾り」も「絵」と同様に「ページいっぱいの表示」をするための追加事項であったとみなしてよい。

「絵」も「囲み飾り」も「ページいっぱいの表示」を補完することは確かであるが、「絵付き」の「絵」は必ず何かを暗示させてしまう。そのため当初は内容に則した「絵」であっても、制作費を考えると内容にある程度目をつむって乱用せざるを得ない。

それに対して、囲み飾りであっても、寄せ集めの飾りである縁枠であれば、枠自体は特別な意味を有していない。例えば、図 19-2 で上下に使われている図柄が図 20-1 では左右に見かけると言った具合である。縁枠はページを埋める手段として最適ことがわかる。ド・ウォードは「絵付き」の「絵」に限界を感じ、暗示するところの少ない「囲み飾り」へ表示形を移したのであった。しかも移行は全面的であったため、「囲み飾り」は「文字書名」本を除いた全てのホイティントン本の専用表示形となり、当然であるが、「絵付き」はまったく使用されなくなってしまった。

「囲み飾り」については McKerrow (R. B.) & Ferguson (F. S.) の *Title-page borders used in England & Scotland, 1485-1640* が有名である。しかし「囲み飾り」の用いられた理由について触れた文章は見当たらない。ことド・ウォードに関する限り、「囲み飾り」(縁枠)とは飾ることより「ページいっぱいの表示」を補完する要素が強かったのではないだろうか。

ところが1530年になると隆盛した「囲み飾り」のホイティントン本は激減し、最後には全く見かけなくなってしまふ。1510~12年頃、コレットはラテン語文法の新教育法を提示し、1527年頃にはその地位を確かなものにしていく。そしてウルジー (Thomas Wolsey, Cardinal) がコレットの *Rudimenta grammatices et docendi methodus* (図 20-2) (stc. 5542.3) をイプスウィッチの彼の学校で採用する頃になると、*Rudimenta* の標題紙は「この本はイギリスの全ての学校向けに書かれている」と断言していた。この言葉が発せられるとスタンブリッジ (John Stanbridge) やホイティントンの本が印刷されなくなるのに長い時間は必要なかった<sup>(28)</sup>。ホイティントン本の終焉である。ド・ウォードにとって金のなる木であったホイティントン本が売れなくなった以上、撤退せざるを得ない。この状況を一言で語っていたのが表 20-2 の 1529年と 1530年との差である。

表 20-2：囲み飾りの件数

	1520	1521	1522	1523	1524	1525	1526	1527	1528	1529	1530	1531	1532	1533	1534	1535
ホイティントン	1	11	5	5	8	8	8	6	5	7	1	3		7		
彼以外の著者		1			1	1	1			1	3		4	3	3	1

表 20-2 によると、「囲み飾り」はホイティントン本にとってほぼ専用表示形であるが、1524~29年にはホイティントン本以外の本でもほぼそと使われている。ド・ウォードの用いた「囲み飾り」の図柄が一般的で、特徴のないことが大いに幸いしたのである。そしてホイティントン本から撤退した 1530年を境にして、「囲み飾り」はド・ウォードにとってはじめて標題紙を埋める一般的な追加事項に変わったのである。

## 21. 「囲み飾り」内の活字表示（1521年～）

これまでは囲み飾りの使用目的について述べたので、次は「囲み飾り」内の表示形を見てみよう。「囲み飾り」内で用いられている表示形は次のように分類できる。

- a. 文字だけで「ページいっぱいの表示」（ただし、「Humiliabit calumniatorem」、「Cum privilegio」を含まない）
- b. 文字＋「小図柄」
- c. 文字＋「Humiliabit calumniatorem」
- d. 文字＋「Cum privilegio」
- e. 文字＋「囲み飾り内の下部に余白のある形」

上記の分類から、「a」、即ち文字だけで「ページいっぱいの表示」をすると、表 21-1 から、最大で 32 行表示できる<sup>(29)</sup>。囲み飾り内はこれだけの表示空間があると見てよい。最多行の例は後述の図 25-1（stc. 25515, 1521 年）に示す通りである。

表 21-1：囲み飾り内を活字でのみ表示（「a」と「e」）

1521		1522		1523		1524		1525		1526		1527		1528	
(15606.5)dR	3	(P25501)dR	16	(P25449)dR	16	(P25467)dR	17	(P25468)dR	16	(P25469)dR	21	(P25470)dR	21	(P25521)dR	32
(P25515)dR	32	(P25572.5)dR	17	(P25450.3)dR	16	(P25518)dR	32	(P25576)dR	12	(P25519)dR	32			(P25523)dR	32
(25559)dR	20			(P25466)dR	16					(P25524)dR	32				
				(P25503)dR	17										
				(P25573)dR	12										

1529		1530		1531		1532		1533		1534	
(P25472)dR	16	(P25565.5)dR	15	(P25474.3)dR	17	(P6126)dG	6	(15602)R	12	(P5278)dG	10
								(L15608)dR	16	(L5543)dR	16
								(L21827)R	16		

## 22. 「b」（文字＋「小図柄」）（1920年～）

小図柄とは図 22-1（stc. 25453, 1525 年）の下部の「Humiliabit calumniatorem」の下に示された図柄を指す。この図柄は一般的で、目立った特徴もないので、ホイテントン本（15 点）にも、他の著者本（9 点）にも使われていることが表 22-1（「b」（文字＋「小図柄」））からわかる。この図柄は空白用の一般的な埋め草である。例えば、図 22-1 と図 22-2（stc. 254449, 1523 年）は同じ著作であっても、後者にはこの文字がなく、下部は空白になっている。この図柄は図 22-1 に欠かせないものではないからである。

表 22-1 によると、文字行数が 17 行以内の時にこの図柄が使用されている。最大で 32 行使える場所で 17 行しか使っていないとなれば、大きな余白が気になる。図柄が埋め草として使用されたことは明らかである。

表 22-1 : 「b」 (文字+「小図柄」)

		1520	1521	1522	1523	1524	1525	1526	1527
標題紙	挿飾り	L24944E dR 14	P25572E dG 11				P25452E dR 14		
		25571E dG 12	P25448E dG 17	P25501E dR 16		P23429aE R 9	6780.5E dR 14	P15948E dG 12	P 25454EdR 14
							P25453E dR 14		

		1528	1529	1530	1531	1532	1533	1534	1535
標題紙	挿飾り	L24944E dR 14	P24815E dR 2	13812E dR 6	P25456.7EdG 16	4842E dR 13		P 5278E dG 8	171E dR 16
		P25490E dR 17	P25456E dR 14	24946E dR 9		P 6126E dG 6			
			P25491E dR 17			L21810E dR 13			
			EP25506 dR 16						

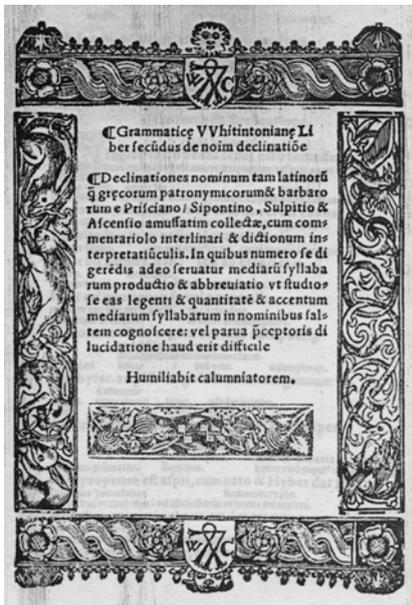


図 22-1 (stc. 25453, 1525 年)



図 22-2 (stc. 25449, 1523 年)

### 23. 「c」 (文字+「Humiliabit calumniatorem」) (1521 年～)

ホイティントン本は、1521 年から「Humiliabit Calumniatorem」(図 22-1) (あの人は悪口を軽蔑) というあてこすりの言葉を表示する<sup>(30)</sup>。しかし図 22-1 と図 22-2 とは同じ著作であるが、後者にはこの言葉が見当たらない。結局、この言葉も、小図柄と同様に、下部の余白に対する埋め草でしかなかった。もっともこの言葉は、表 23-1 (Humiliabit calumniatorem) からわかるように、ホイティントン本専用の埋め草であり、他の著者本には使用できない。小図柄とは大きな違いである。表 23-1 から、この言葉は文字行数が平均で 17 行の時に使用されている。最大 32 行とは 15 行の差があるので、この差を埋めるために考え出された工夫の一つと言える。

表 23-1 (Humiliabit calumniatorem)

		1521		1522		1523		1524		1525	
標 題 紙	罫 飾 り	P25459 dR	17+H	P25484 dR	19+H			P25486.3 dR	17+H	P25453 dR	14+H+E
		P25481 dR	19+H	P25560 dR	14+H			P25550 dR	19+H	P25487 dR	19+H
		P25482 dR	19+H	P25560.7 dR	16+H			P25551 dR	19+H	P25504 dR	16+H
		P25483 dR	19+H					P25562 dR	16+H	P25552 dR	20+H
		25547 dR	19+H					P25562.3 dR	22+H	P25563 dR	20+H
		P25548 dR	20+H					P25574 dR	13+H		
		P25558 dR	17+H								

		1526		1527		1528		1529		1530		1531	
標 題 紙	罫 飾 り	P25488 dR	17+H	P 25489 dR	19+H			P25556 dR	19+H	P25565.5 dR	15+H	P25474.3 dR	15+H
		P25488.5 dR	15+H	P 25505 dR	16+H								
		25577 dR	14+H	P 25554 dR	19+H								
		P25580 dR	14+H	25578 dR	14+H								

H : Humiliabit Calumniatorem

## 24. 「d」(文字+「Cum privilegio」)(1532年～)

「Cum privilegio」とは出版許可のことである。表 24-1 から、この言葉を標題紙に見かけるのは 1532 年と 1533 年のわずか 2 年間だけで、しかも「罫み飾り」内に限られている。1 点 (stc. 10467, 1532 年) を除くと、残りはすべて出版を繰り返してきたホイティントン本である。例えば、図 24-1 (stc. 25567.5, 1533 年) は 1533 年の出版であるが、同じ著作である図 24-2 (stc. 25558, 1521 年) は 1521 年に既に出版されているので、いまさら出版許可を得るまでもないはずである。それに図 24-1 (stc. 25567.5, 1533 年) だと、「Humiliabit calumniatorem」、「Cum privilegio」そして小図柄の三者が併用されている。それに対して「Cum privilegio」と小図柄を外したのが 1521 年の図 24-2 である。図 24-2 では下部の余白が目立つので、その余白を埋めたのが図 24-1 である。この両者を比べれば、図 24-1 の下部が余白を埋めるためになさせた工夫であることは明らかである。なお、「Cum privilegio」は文字行数が 19 行以内の時に使用されているので、「Humiliabit calumniatorem」や小図柄と同種の埋め草であることがわかる。

表 24-1 : 「Cum Privilegio」

		1532		1533		1534	
罫 み 飾 り	(L10467)dR	13+CP	(P 25477)dR	19+CP	(P 25579)dR	12+CP	
			(P25493.3)dR	16+CP			
			(25507.5)dG	14+CP			
			(25508)dG	14+CP			
			(P25557)dR	18+CP			
			(P25567.5)dR	15+CP			

CP: Cum Privilegio

それに表 24-2 によれば、「Humiliabit calumniatorem」、「Cum privilegio」そして小図柄の三者の全部あるいは二者が複合して使用されている例も見つかる。この複合形はいずれも文字表示が平均 14 行以内なので、三種類の埋め草を単独で使用した場合より行数が少ない時に用いられて

表 24-2 : 「Humiliabit Calumniatorem」、 「Cum Privilegio」そして図柄の複合使用

	1526	1527	1528	1529	1531	1532	1533
標題紙	P25564E	P25454E	P25490 E	P25456 E	P25474.7E		P25493.3E
用飾り	13+SP+H	14+H+SP	17+H+SP	14+H+SP	13+H+SP		16+SP+H+CP
紙			P25564.6E	P25491 E			25507.5
				17+H+SP			14+H+CP
				P25491.3E			25508
				17+H+SP			14+H+CP
				P25565 E			P25567.5E
				13+H+SP			15+SP+H+CP

SP: 小図柄

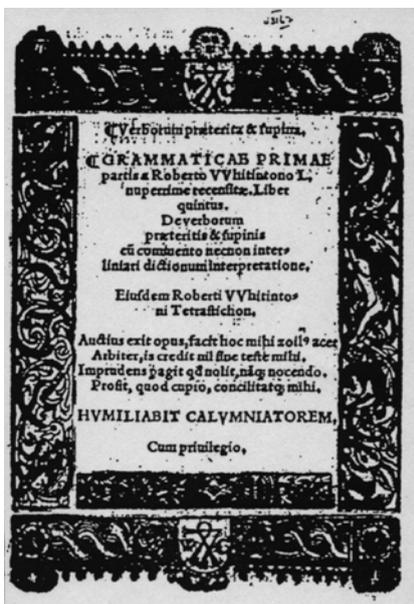


図 24-1 (stc. 25567.5, 1533 年)

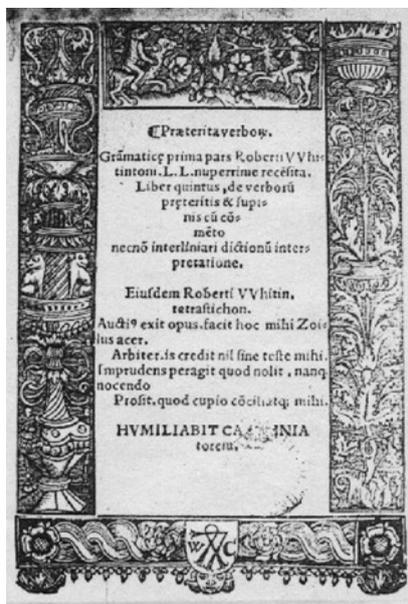


図 24-2 (stc. 25558, 1521 年)

いることが分かる。

図柄類はともかくとして、「Humiliabit calumniatorem」そして特に「Cum privilegio」が余白の埋め草であったとは思っても寄らないことである。しかしド・ウォードに限って言うならば、そう考えざるを得ない。彼の目指した表示の原則が「ページいっぱいの表示」であり、囲み飾りの場合も例外ではなかったのである。

「囲み飾り」内でも余白を埋め尽くす努力がなされていた事は明らかである。「囲み飾り」を用いることによって表示スペースは減少したが、大きな余白は依然として残っていた。そして悪いことに、全体を「囲み飾り」で囲ったために、これまで使用してきたページ大の木版画が使用出来なくなってしまった。例外は 1529 年の stc. 24815 と 1530 年の stc. 272a の 2 点だけである。

## 25. 「文字図形」表示 (1521 年～)

表 25-1 (絵付きの場合の活字表示行数) によると、1501 年から本格的に使用しだした「絵付き」の場合、文字表示は最小で 1 行、最大で 14 行となり、平均は約 4 行を埋めていた。それに対

白への恐怖、黒へのあこがれ

表 25-1：絵付きの場合の活字表示行数

1501	1502	1503	1504	1505	1506	1507	1508	1509	1510
E P281 3	E P285.5 1	169 E 1	16256 E 1	11605 E 3	1380.5 E 3	P 15806 E 4	253 E 1	P 1497 E 10	P254 E 10
	P11603 E 3	319 E 2		E 11614 3	5199 E (W) 2	21430 E (W) 2	P 7706 E 2	P 3547 E 1	12091 E 1
	E 11613 3	7016.2 E 2			12351 E 5	23164.2 E 3	P 9351a E 1	P 12475 E 1	P 14518 E 2
	P12472 E 1	E 15899 3			12381 E 1		13604 E 2	12943 E 1	P 14864 E 8
	頭 E 15376 7				P 14863 E 7		P 16120 E 3	12943.5 E 1	15345 E 1
					P 21259 E 4		P 17971 E 1	14572 E 2	P 15576 E 6
							P 21262 E 2	15258 E 1	P 15576.8 E 4
							P 23164.4 E 2	P 16121 E 7	P 17016 E 1
							25007 E (W) 1	17537 E 2	20883 E 5
								18566 E (W) 1	21286.3 E (W) 1
								19305 E 1	23167 E 2
								P 21007 E 1	P 23178 E 2
								23164 E 1	23430 E (W) E 1
								23195.5 (W) 1	
								P 23941 E 5	

1511	1512	1513	1514	1515	1516	1517	1518	1519
1966 E 4	P 4839.7 E 1	254.3 E 1	169.5 E 2	P 271 E 4	P 10627.5 E 1	P 3547a E 1	P 1385 E 2	P 5609 E 1
5574 E 1	P 6470 E 1	3290 E 1	P 6035 E 1	P 272 E 3	P 17498 E 3	P 5095 E 4	5953 E 3	P 5609.5 E 1
P 6573 E 1	P 15577 E 1	P 18934 E 5	P 6035.5 E 1	P 318 E 3	P 20081 E 4	P 7015 E 3	P 11617 E 3	17973.5 E 1
P 13831 E G 8	P 19767.3 E 6	P 22580 E 12	P 11616 E 3	9985 E 2	頭 20438 E 7	P 11407 E 1	P 13837 E 8	P 20876 E 2
18567 E 1	頭 20437 E 7	23153.10 E 1	P 13832 E 9	14039 E 1	P 25444 E 13	P 16128 E 7	P 15578 E 5	P 20894.7 E 1
頭 20436 E 7	P 25447 E 10	P 25459.2 E 15	P 16125 E 9	P 14864.5 E 8	P 25459.8 E 14	P 21071 E 1	P 18475 E 6	P 21260 E 4
P 21336 E 2	P 25525 E 5	P 25509.5 E 5	17540 E 1	P 16126 E 7	25479.5 E 13	P 22558 E 1	18568 E 1	P 23147.6 E 2
23427a.3 E 9	P 25541 E 6		P 20079 E 4	17026 E 1	P 25510R 5	P 23185 E 2	P 18875 E 1	23196.8 E 1
25443.4 E 10			22557 E 1	P 20080 E 4		P 23196.2 E 1	P 23154 E 2	P 25446 E 12
25478 11			24814 E 2	20881.7 E 5		P 25445 E 13	P 23167.3 E 2	P 25499 E 13
				23013 E 1		P 25459.9 E 14	23429 E 1	P 25512 E 10
				23196 E 1		P 25463 E 14	E P 23956(1) 9	P 25514 E 6
				23428 E 1		P 25477a E 14	P 25545 E G 5	P 25540.5 E 14
						P 25479.6 E 13	P 25545.3 E 5	P 25546 E 6
						P 25511.5 E 8		
						P 25543 E 5		

1520	1521	1522	1523	1524	1525	1526	1527
P 6833 E 3	965 E G 5	P 389 E G 12	15581 E R 5	14083 E G 1	P 1918 E G 2	P 6897 E G 2	966 E G 6
P 10450.5 E 6	P 10631.5 E G 1	P 6895 E G 2	P 15934 E G 6	15579 E G 2	P 3266 E G 1		
P 10450.7 E 8	P E 10894 d G 8	P E 10893 d G 8	P 17499 E G 3		P 10608 E G 1	P 15399 E G 2	P 23197 E G 1
P 10631 E 1	14558 E G 4				14044 E G 1	P 17532 E G 3	
P 12046 E 4	P 23168 E G 2				18528 E G 1	P 23168.7 E G 2	
P 17027 E 1	P 25464 E 13				21473 E G 7	P 23169 E G 2	
P 17038 E 1					P 23182 E G 2	P 23182.2 E G 2	
P 25479.14 E 12					P 23196a.6 E G 1		
25569.3 E 11					P 25417 E G 2		

1528	1529	1530	1531	1532	1533	1534	1535
P 6830 E G 4	P 23148a E G 4	P 3267 E G 1	P 3278 E G 9	P 3183.5 E G 9	P 656 E G 4	P 20882 E G 7	P 5729 E G 4
10002 E G 2	P 23148.12 E G 4	P 5092 E G 4	P 23183 E G 3	P 5610 E G 2	P 7500 E G 4	P 23152 E G 6	
P 13836 E G 8	P 23174 E G 2	P 15578.7 E G 5	P 23244 E G 2	P 6035a E G 1	P 14045 E G 1	P 23174.7 E G 3	
P 17974 E G 1	P 23182.6 E G 2	17541 E G 1		6932 E G 1	P 25008 E G 9	P 23184.5 E G 3	
頭 20439 E G 8	P 23198 E G 1	P 18475 E G 6		P 10839 E G 3	P 25423 E G 9	P 23198.7 E G 2	
P 21008 E G 1		19119 E G 2		P 17975 E G 1			
22411 E G 1		P 20413 E G 2		P 18570 E G 1			
P 23148.10 E G 4		P 22559 E G 2		P 22560 E G 2			
E P 23959 G 9		P 23174.5 E G 2		P 25421.6 E G 1			
		P 25422 E G 7					

して、囲み飾り内の文字行数は、表 25-2 (囲み飾り内の行数) によると、最小が 2 行、最大が 32 行で、平均は 16 行になる。標題紙上の表示面積が「囲み飾り」のおかげで狭くなったにもかかわらず、大幅な行数増である。いったい何が起こったのであろうか。

図 8-1 や図 15-1 からわかるように、「絵付き」の場合、書名も、目次も横幅いっぱいに表示さ

表 25-2：囲み飾り内の行数

1520 (25571 E) dG	12	1521 (15606.5) dR	3	1522 (P25484) dR	19	1523 (P25449) dR	16	1524 (P23429a E) R	9	1525 (6780.5) dR	14	1526 (P15948 E) dG	12	1527 (E P10895) dG	8
		(P25448) dG	17	(P25501) dR	16	(P25450.3) dR	16	(P25467) dR	17	(P25452) dR	14	(P25469) dR	21	(P25454) dR	14
		(P25459) dR	17	(P25560) dR	14	(P25466) dR	16	(P25486.3) dR	17	(P25453) dR	14	(P25488) dR	17	(P25470) dR	21
		(P25481) dR	19	(P25560.7) dR	16	(P25503) dR	17	(P25518) dR	32	(P25468) dR	16	(P25488.5) dR	15	(P25489) dR	19
		(P25482) dR	19	(P25572.5) dR	17	(P25573) dR	12	(P25550) dR	19	(P25487) dR	19	(P25524) dR	32	(P25505) dR	16
		(P25483) dR	19					(P25551) dR	19	(P25504) dR	16	(P25564) dR	13	(P25554) dR	19
		(P25515) dR	32					(P25562) dR	16	(P25552) dR	20	(25577) dR	14	(25578) dR	14
		(25547) dR	19					(P25562.3) dR	12	(P25563) dR	20	(P25580) dR	14		
		(P25548) dR	20					(P25574) dR	13	(P25576) dR	12	(P25519) dR	32		
		(P25558) dR	17												
		(25559) dR	20												
		(P25572) dG	11												

1528 (L 24944 E) dR	14	1529 (P24815 E) dR	2	1530 (P272a E) dG	5	1531 (P25456.7) dG	16	1532 (4842 E) dR	13	1533 (15602) R	12	1534 (P5278) dG	10	1535 (L 171 E) dR	16
(P25490) dR	17	(P25456) dR	14	(13812 E) dR	3	(P25474.3) dR	17	(P6126) dG	6	(L 15608) dR	16	(L 5543) dR	16		
(P25521) dR	32	(P25472) dR	16	(24946 E) dR	9	(P25474.7) dG	13	(L 10467) dR	13	(L 21827) R	13	(L 10467.5) dR	13		
(P25523) dR	32	(P25491) dR	17	(P25565.5) dR	15			(L 21810) dR	13	(P25477) dR	19				
(P25564.6) dR	13	(P25491.3) dR	17							(P25493.3) dR	16				
		(P25506) dR	16							(25507.5) dG	14				
		(P25556) dR	19							(25508) dG	14				
		(P25565) dR	13							(P25557) dR	18				
										(P25567.5) dR	15				
										(P25579) dR	12				

としている。それに対して「囲み飾り」を用いた図 25-1 (stc. 25515, 1521 年) は書名、目次の順に表示されているが、書名の表示方法にはこれまでに見られない方式が採られている。10 行目までは書名を表示しているが、2 行目以降は左右に空きがあって行幅いっぱいに表示していないばかりでなく、1 単語すら完全に示そうとしていない。Calcographorum は “Calco”、”gra”、”phorum” に 3 分割され、”gra” はこれだけで 1 行として表示されているからである。これまでは短い表示をいかに長く見せるかの試行史であった。少ない語数をいかに膨らませて多行表示にするかで手を焼いていた歴史をふり返ると、単語の部分表示、それもわずか 3 文字で 1 行を済ますことなど思いもよらない出来事である。これまでも単語は行末に限って分割表示されてきたが、このような区切り方はしていない。こうした表示がなぜ可能となったのであろうか。ページいっぱいの表示さらには行いっぱいの表示という考え方を変更したのであろうか。

図 25-1 の場合、最初の 10 行までは行の左右に余白が目立つものの、11 行目からは相変わらず行いっぱいの表示となっている。基本的な変更があったとは考えにくい。10 行までが書名群、それ以降の行が目次群なので、両者が区分表示されていることは確かである。しかし書名表示であれば左右に余白を設けてよいという理由は見あたらない。こうした表示ができたのは別の理由によると考えざるを得ない。

書名表示の部分はよく見ると文字を使ってコップを形作っているのがわかる。コップとは一般的に表現すれば図柄、あるいは絵である。「囲み飾り」内で文字によって図形表示をしている様子を示したのが表 25-3 (囲み飾り内の文字図形) である。この表を見ると、大半が図柄表示され、図柄表示でないのは 16 点にすぎない。図形は、コップの他に、逆三角形 (図 25-2 (stc. 25470,



図 25-1 (stc. 25515, 1521 年)



図 25-2 (stc. 25470, 1527 年)

表 25-3：囲み飾り内の文字図形

	1520	1521		1522		1523		
標 題 紙	(25571E) dG	T7, Sti. 5	(15606. 5) dR	▽	(P25484) dR	T5, dv. 14cp	(P25449) dR	T3, Con. 13▽
			(P25448) dG	T5, Con.12 N	(P25501) dR	T4, Sti. 12	(P25450. 3) dR	T3, Con. 13▽
			(P25459) dR	T10, Sti. 7cp	(P25560) dR	T7, Sti. 7	(P25466) dR	T4, Sti. 12N
			(P25481) dR	T5, Adv. 14 cp	(P25560. 7) dR	T10, Sti. 6	(P25503) dR	T4, Sti. 13▽
			(P25482) dR	T5, Adv. 14cp	(P25572. 5) dR	T13, Sti. 4 W	(P25573) dR	T7, Sti. 5 N
			(P25483) dR	T5, Adv. 14cp				
			(P25515) dR	T10, Con. 22cp				
			(25547) dR	T9, Sti. 10				
			(P25548) dR	T10, Sti. 10cp				
			(P25558) dR	T9, Sti. 8 cp				
			(25559) dR	T9, Sti. 11				
			(P25572) dG	T6, Sti. 5 N				

	1524	1525		1526		1527		
	(P23429aE) R	T1, Adv. 8 cp	(6790. 5) dR	T5, Lector. 9cp	(P15948E) dG	T8, Imp. 4 S	(P 25454) dR	T2, Con. 12 N
	(P25467) dR	T4, Sti. 13 N	(P25452) dR	T2, Con. 12 N	(P25469) dR	T4, Sti. 17	(P 25470) dR	T4, Sti. 17
	(P25486. 3) dR	T5, Adv. 12 cp	(P25453) dR	T2, Con. 12 N	(P25488) dR	T5, Adv. 12 cp	(P 25489) dR	T5, Adv. 14 cp
	(P25518) dR	T10, Con. 22, cp	(P25468) dR	T4, Sti. 12	(P25488. 5) dR	T4, Adv. 11	(P 25505) dR	T4, Sti. 12
	(P25550) dR	T9, Sti. 10	(P25487) dR	T5, Adv. 14cp	(P25524) dR	T10, Con. 22, cp	(P 25554) dR	T9, Sti. 10
	(P25551) dR	T9, Sti. 10	(P25504) dR	T4, Sti. 12	(P25564) dR	T7, Sti. 6	(25578) dR	T9, Sti. 5 cp
	(P25562) dR	T10, Sti. 6	(P25552) dR	T9, Sti. 11	( 25577) dR	T9, Sti. 5cp		
	(P25562. 3) dR	T7, Sti. 5	(P25563) dR	T10, Sti. 10	(P25580) dR	T9, Sti. 5cp		
	(P25574) dR	T9, Sti. 4 cp	(P25576) dR	T7, Sti. 5 N	(P25519) dR	T10, Con. 22, cp		

	1528	1529		1530		1531		
	(L24944E) dR	T12, Imp. 2 S	(P24815E) dR		(13812 E) dR	T3, Imp. 3	(P25456. 7) dG	T4, Con. 12
	(P25490) dR	T5, Adv. 12 cp	(P25456) dR	T2, Con. 12 N	= (24946E) dR	T6, Adv. 3 cp	(P25474. 3) dR	T6, Sti. 9
	(P25521) dR	T10, Con. 22, cp	(P25472) dR	T3, Sti. 13 N	(P25565. 5) dR	T9, Sti. 6 S	(P25474. 7) dG	T4, Sti. 9
	(P25523) dR	T10, Con. 22, cp	(P25491) dR	T5, Adv. 12N				
	(P25564. 6) dR	T7, Sti. 6	(P25491. 3) dR	T5, Adv. 12				
			(P25506) dR	T4, Sti. 12				
			(P25556) dR	T9, Sti. 10				
			(P25565) dR	T7, Sti. 6				

1532		1533		1534		1535	
= (4842 E) dR	T3, Con. 10N	= (15602) R	T10, Imp. 2 ▼	(P 5278) dG②	cp	= (L 171) dR	T5, Con. 11 ▽
(P 6126) dG	T2, Imp. 4 ▼	= (L15608) dR	T11, Imp. 5 ▽	= (L 5543) dR	T8, Epig. 5+Imp. 3cp		
(L10467) dR	T6, Adv. 7 ▽	= (L21827) R	T11, Imp. 2 cp	= (L10467.5) dR	T6, Con. 7 ▽		
(L21810E) dR	▼	(P25477) dR	T8, Sti. 9+Imp. 2 ▼				
		(P25493.3) dR	T6, Adv. 11 ▼				
		(25507.5) dG	T3, Sti. 11 ▽				
		(25508) dG	T3, Sti. 11 ▽				
		(P25557) dR	T8, Sti. 10 ▽				
		(P25567.5) dR	T9, Sti. 6 S				
		(P 25579) dR	T7, Sti. 5 N				

S : 砂時計    W : wine cup    ▽ : 逆三角    ▼ : 二重逆三角

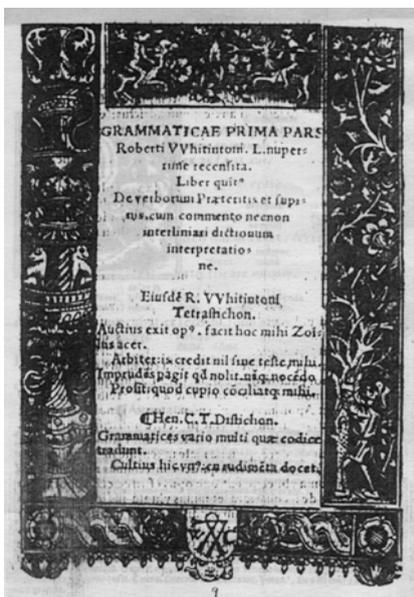


図 25-3 (stc. 25559, 1521 年)

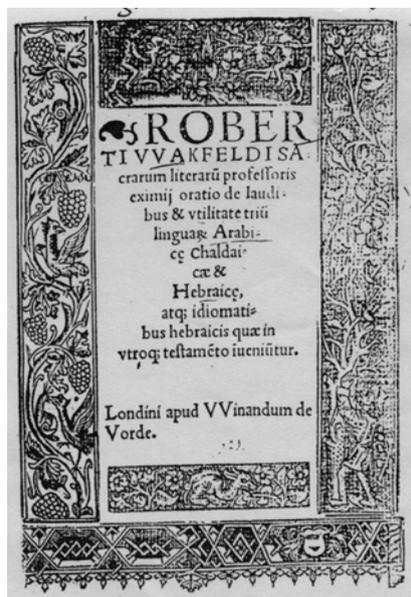


図 25-4 (stc. 24944, 1528? 年)

1527 年))、二重逆三角形 (図 25-3 (stc. 25559, 1521 年)) さらには砂時計 (図 25-4 (stc. 25572.5, 1522 年)) があり、いずれも行幅いっぱいに表示になっていないことがわかる。

これまで絵と言えれば木版が使われていた。しかし絵を表す方法は木版だけではない。活字を使っても、表示された状態が図案とか図形になっていれば、「絵」であることにはかわりはない。文字を図形的に表示することによって、横幅いっぱい、さらには上下いっぱいに表示しなければならないという条件を越えようとしたのである。

さらに言えば、この文字図形表示は「絵付き」の限界をも超えたことになる。木版の絵を使用すれば文字 (表示) の使用量が少なく済むばかりでなく、絵を取り巻く余白も大目に見てもらえることは前述したとおりである。こうした利点があるにしても、木版の絵は欠点も抱えていた。絵の内容があまりに本の主題に近づきすぎると、他の主題の本には不向きとなる。又、絵自体の制作費もばかにならない。この矛盾に対する解決策が文字を使った図柄表示だったのである。

前述したように、表 25-3 (囲み飾り内の文字図形) によると、1529 年を除けば、囲み飾り内の文字はほぼ文字図柄で表示されている。それに対して表 25-4 からわかるように、「絵付き」で文字図形は 1520～1530 年間に 5 回しか採用されていない。使用回数が増えてくるのは 1531 年以降である<sup>(31)</sup>。

しかし文字だけで標題紙表示をする「文字書名」は使用件数が少ないこともあって、1521 年 (stc. 25500) (逆三角形) と 1528 年 (stc. 16891) (逆三角形) に各 1 回用いられたにすぎない。「here」形の絵付き表示では 1519 年 (1 件) と 1530 年 (3 件) に文字図形の表示を見かける。1519 年はカップ形そして 1530 年では 2 件 (stc. 1912, stc. 10012) が逆三角形で、1 件 (stc. 12947) は砂時計である。文字の図柄表示は汎用性に富んだ新しい表示形の可能性を秘めているが、当初はもっぱら囲み飾り専用の表示形式に留まり、新しい可能性をド・ウォードはほとんど意識していなかったように見える。

表 25-4: 「絵付き」 標題紙の文字図柄

	1520	1521	1522	1523	1524	1525	1526	1527	1528	1529	1530	1531	1532	1533	1534	1535
stc	25569.3			15581		21473		966			19119	3278	3183.5	656		5729
												23244	10839	25008		

とはいってもこの表示形、あるいは表示方法が導入されたことによって利点が生まれた。1 文字では許されないが、音節であれば最小単位であっても 1 行とみなす余地が生まれたからである。おかげで行いばいの文字表示をしなくても済むようになり、文字表示行を大幅に増加させることが可能となった。前述の図 25-1 の「gra」がまさにそれである。

文字を使った図形表示についてヴィン (Vinn) は次のように言っている。

漏斗形や逆円錐形は後に章末を暗示する表示形として使用された ……

活字で漏斗、ダイヤモンド、ワイングラス、水飲み用のコップ、十字架、楔、ピラミッド、球形と言った風変わりな図形表示をするメリットといえば、木版の印刷者マークの前触れとなったことである<sup>(32)</sup>。

文字図形が章末の予告表示であれば、章末ページでも余白を埋めるために文字を図形表示していたことがわかる。しかし印刷者マークの前触れと言う点についてはド・ウォードに関するかぎり言葉たらずであり、この点については後述する。

## 26. 大型活字の 1 行文字書名 (1532 年～)

「文字を使った図柄表示」は活字行数の増加だけでなく、表示形自体の変化ももたらした。巻き軸は 1 行及び 2 行書名用の専用表示形として 1530 年まで用いられたことは前述したとおりであるが、1530 年からは 1 行、2 行そして 3 行書名が行を埋めない形で表示されているからである。使用状況は表 9-1 を参照いただきたい。これらの書名には大型活字が使われている。これまでの

考え方をすれば、活字の大小にかかわらず行いっばいの表示をしなければならなかった。行を埋めなくて済むようになったのは「文字を使った図柄表示」の考え方が影響していると見てよい<sup>(33)</sup>。なお、1530年までに大型活字を使った1行書名が5点使われていたが、これらはいずれも法律関係ばかりで、一般書名本は含んでいない。

## 27. 表示形の試行

1501年から「文字書名」がほとんど使用されなくなり、1517年には再び使用されるようになったことは前述したとおりである。この間、「絵付き」形、木版書名、巻き軸、印刷事項付き、内容説明文付き、目次、詩が行数を増やすための表示形として次々と表れては消えていった。「文字書名」形も1501～16年間に7回使用され、同様の動きを見せていた。

1504年 (stc. 16231)、1506年 (stc. 22270.5、stc. 12139)、

1508年 (stc. 387、stc. 7016.5)、1513年 (stc. 25459.3)、1514年 (stc. 25496.3)

1504年の3行書名表示にはこれといった目立った特徴は見られないが、1506年になると、行末が単語の途中になっていれば、ハイフンで区切って改行し、行いっばいの表示を心がけている。1508年には2行書名に大型活字を使い、短い書名ながらもページに占める割合を増やそうと努力している。そして1513年と1514年にはそれぞれ図27-1 (stc. 25459.3, 1513) と図27-2 (stc. 25496.3, 1514年) からわかるように、14行表示が出現し、文字だけでページの半分以上を占め

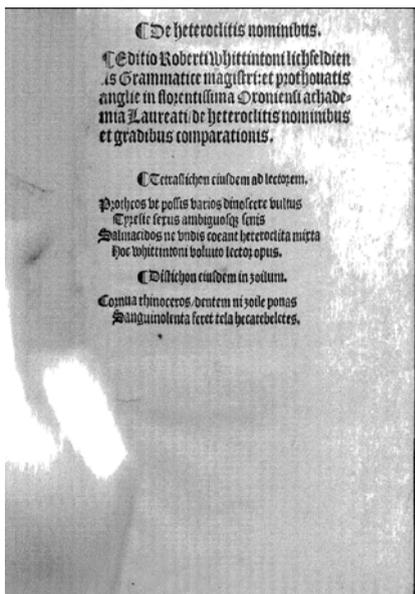


図27-1 (stc. 25459.3, 1513)

Courtesy of the Division of Rare and Manuscript Collections, Cornell University Library

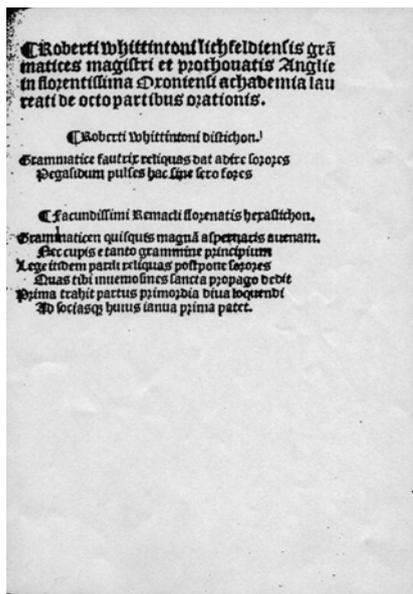


図27-2 (stc. 25496.3, 1514年)

るようになる。「文字書名」形も「ページいっぱいの表示」を目指した試行を続けていたのである。

1517年に「文字書名」は復活したが、それで試行史が完了したわけではなかった。復活「文字書名」、囲み飾り、文字図形表示、大型活字の1行文字書名と言った具合に、その後も表示形の変遷は続いている。そして最終的には文字を使った図形表示を採用すると、簡便に行数を増やすことが可能となり、行いっぱいの表示というくびきから解放されたのである。(続く)

#### 注

- (13) Moran, J. *Wynkyn de Worde*. London, Wynkyn de Worde Society, 1987. p. 35.  
もっとも、初期にはピンソン (Richard Pynson)、そして後期にはトレベリス (Peter Treveris) もホイティントン本を印刷、出版している。
- (14) White, Beatrice. *The vulgaria of John Stanbridge and The vulgaria of Robert Whittinton*, edited with an introduction and notes by Beatrice White. London, Published by EETS by K. Paul, 1932. pp. 145-6
- (15) *ibid.* p. 146.
- (16) *op. cit.* Moran, J. *Wynkyn de Worde*. p. 35.
- (17) このエラスムスの著作 (stc. 10450.7) は改訂版であり、前年の1519年には初版 (stc. 10450.6) が出ている。初版では書名しか示されていないので、1520年の作品に突然「目次」を付けた理由は不明である。
- (18) McKerrow, R. B. *An introduction to bibliography for literary students*. Oxford, At the Clarendon Press, 1927, 1967. p. 91.
- (19) *ibid.* p. 90.
- (20) White, Beatrice. *op. cit. The vulgaria of John Stanbridge and The vulgaria of Robert Whittinton*. p. xxiii.  
Whittinton, R. D. De Concinnitate grammatices et constructione. sig. A2. (STC2. 25541)
- (21) *De Concinnitate Grammatices et Contruccione*. 1512. p. Aii.
- (22) 詩の文章には文法的におかしい部分がある。中世ラテン語の崩れをある程度考慮に入れたとしても、文法家の考えた表現とは考えにくいと思われる節があるらしい。
- (23) 「囲み飾り」については既に説明したとおりであるが、略述すると、標題紙の周りを囲んだ図柄のことである。
- (24) Bennett, H. S. *English books & readers, 1475 to 1557*. 2nd ed., reprinted. 1970. p. 226.
- (25) 例外は次の通りである。1520年 (stc. 25572)、1521年 (stc. 25448, 25572)、1530年 (stc. 272a)、1531年 (stc. 25456.7, 25474.7)、1532年 (stc. 6126)、1533年 (stc. 25507.5, 25508)、1534年 (stc. 5278)  
なお、ド・ウォードの表で標題紙が全てローマン体で示されている場合は勿論であるが、冒頭にローマン体が使用されている場合も、ローマン体使用として扱っている。図3-25515 (1521年) は後者の例である。同じことはゴシック体についても言える。従って図3-25456.7 (1531年) はゴシック体表示として扱っている。
- (26) 例外は次の通りである。1524年 (stc. 23429a)、1533年 (stc. 15602, 21827)
- (27) ホイティントン本の stc 番号は 25443.2 ~ 25581 である。
- (28) Bennett, H. S. *op. cit. English books & readers, 1475 to 1557*. 2nd ed., reprinted. 1970. p. 88.
- (29) stc. 25472 (1529年) は例外である。中間の行に余白を設け、最後の行まで使用した形を取っているからである。
- (30) ホワイトはこのあてこすりの言葉が1523年から表示されるようになったと言っている。(White, Beatrice. *The vulgaria of John Stanbridge and The vulgaria of Robert Whittinton*, edited with an introduction and notes by Beatrice White. London, Published for EETS by K. Paul..., 1932. p. xxiii) しかし表 23-1 からわかるように、1521年には早くも使用されている。

- (31) stc. 25569.3 (1520年)は「絵付き」であるが、書名などの表示が逆三角形になっている。しかしこの標題紙はこれまでのド・ウォードの標題紙と比べるとかなりあか抜けている。国外の印刷者の手になる作品かもしれない。
- (32) Vinne, Theodore Low de. *A treatise on title-pages*. New York, Haskell House, 1972. PP.15-16. この中で、詩でも言葉を選べば、幾何学模様で表示できる、というPuttenham (G)の言葉を引用している (*The arte of English poesie*) (p.17-19)。
- (33) ド・ウォードの表では法令 (stc. 9000番台の statutes) 類をはずしている。法令類はパラグラフ書名で始まっていることが多いが、stc. 9351aのように、「1行書名+絵 (木版)」の形をとっている場合もある。内訳は次の通りである。Manipulus curatorum (stc. 12475, 1509年)、Exoneratorium (stc. 10627.5, 1516年；stc. 10631, 1520年；stc. 10631.5, 1521年)、Returna Breviarum (stc. 20894.7, 1519年)